

「とにかくいっぱい喘ぐ子」という役が来たときが最悪だった。
コトが終わって素面に戻ったとき、舌を噛み切って死にたくなったほどだ。

『アレキサンドライト』より

「……はあ」

バーのカウンターの端の席、マフィアが仕事をするにはまだ早い夕時に、コーヒーカップの中の黒い湖面に映った己の憂鬱な表情を見つけて、俺はため息と角砂糖をふたつ落とした。

もうすぐ太宰との約束の時間だ。あいつはいつも俺を少し待たせるから、この甘ったるいコーヒーを飲み干してもなお持て余すくらいの時間はあるだろう。その時間を使って、心の準備というやつをしなければならぬ。今夜は特に念入りに。

「もしもし中也？ 実は私、また振られてしまっただけ」

幹部専用の端末が鳴った瞬間、いやな予感を感じたのだ。その日は久しぶりのオフで、よほどの急用でない限り連絡には出ない、何かあれば幹部専用の番号までかけてこいと部下たちに伝言を残していた。

そもそも幹部専用の番号を知っているのは同じ幹部か、その秘書とごく限られた人間だけであるから、必然的に連絡しようとするればその前に彼らへの相談が必要になる。

その段階を経ても解決に至らず俺まで連絡が来るといふことは、それはもう組織の一大事クラスの場合ということなので、ひとたびこの端末が鳴ったなら、出ないわけにはいかないのだ。たとえ、絶対あいつだと予感していても。

なんで度々変更されるこの番号を知っているのかと、無駄と分かりながらクレームをつけたら、「まあまあそんなことはいいじゃない」と案の定軽く流された。

埠頭に停めた愛車のバイクに背を預け、言っとくが今日は無理だぞ、と貴重な休日を邪魔されたくない気持ちを含めて先に断ったら、意外にも「構わないよ。三日後でどうかな」という返答がかえってきた。

いつも俺の都合なんて関係ないという態度で強引に振り回してくる太宰が、どうかな、なんて尋ねてきたものだから、それに驚いて「ああ、夜なら」と返してしまっていた。すると、太宰から「ありがとう、助かるよ」とまで言われたので、ますます調子がくるってしまった。

「なんだ、今回はまた随分と参ってんな」

そんなに入れ揚げていたのか、とは続けられなかった。

いつもの仕事着で武装している自分ならきつと、ざまあねえな色男、と煽りに煽ってやれただろう。けれどその日の自分は、ジーンズにライダーズジャケットという普段着で、朝から何も考えずにただバイクを走らせ、風に毒気をさらわれてしまったらしかった。

「そうなのだよ。いくら優秀で演技派な中에서도、今回ばかりは私を慰めることはできないかもしれない……」

「あ？ 誰に言ってるんだ手前」

それなのに、太宰の方から煽られると、脊髄反射で迎え撃ってしまう。よよよ……とわざとらしく悲しむ太宰の声にかちんときて、今回もきつちり慰めてやるよ約束だからな、と啖呵を切ってしまった。すると太宰は、電話の向こうでふふと笑った。

「私の方も所用があつてね、どんな女性だったのかいつものように説明する時間が取れそうもない。そこで、彼女の口調や立ち居振る舞いがよく分かる資料を送っておくから、それを熟読してから来てくれたまえ」

「資料お？ めんどくせえな……そんな変わり者の女かよ」

「そういうわけでもないのだけど、恥ずかしがりやの中也には、ちよつと難題かと思つてね」

何言つてんだこいつ「何言つてんだこいつ」おつと口に出してしまつたが、太宰は気にするでもなく「それじゃ、荷物が届くから、気が済むまで走り屋したら今夜は自宅の方に帰つてね」と言い残し、電話を切つた。

幹部専用の番号も、自分が今日休日であることも、休日の過ごし方も、みんな知られてしまつていたのであつた。

「溜息も出ねえな……」

今更その程度のことには驚くことも、腹を立てる気にもならない。俺はバイクに跨り、エンジンを噴かせた。

どこまで走つたつて、俺はあいつから逃げられない。

いや、正確には逃げる気がないのだ。一度は鎖ごと放り捨てて行つてくれたというのに、いつまでもそれが繋がれていた首輪を自ら外さぬままでいる。

家に帰つて、その資料とやらを受け取るのがひどく憂鬱だつた。本当は、太宰が執着していた誰かの話なんてちつとも聞きたくはない。自分と違ふところを数えてがっかりするだけなのだ。

自傷行為じゃねえか、と思う。

風が頬を切つてゆく。どうせなら、自分が十代の頃から後生大事に抱えているこの恋心も、組織の機密をハックするように暴いてくれればよいものを。ただ俺が言わないでいるというだけの脆弱なセキュリティは、太宰に突破されることなく、エラーを吐き出し続けている。

中也が自分に惚れている。これ以上ない俺の弱みだろうに、いっこうにその事実を突きつけて

こないのは、太宰にとつてそれが殊更興味のない情報だからなのだろうか。

自分から言い出したことだが、そろそろやめたいな、と思った。それと同じくらい、やみつきになっている自分を自覚してもいたけれど。

始まりは、このバーで偶然居合わせたときのことだった。

話しかけんな他の店に行けよと邪険にしたのに、太宰は同じカウンターに座り、今日女の子に振られちゃってさあとぼやき出した。

俺の金で飲み明かそうと企んでいるのは明白で、付き合っていていられるかと置いて帰ろうとしたとき、大昔の約束を持ち出して引き止められたのだ。

十五歳のとき、電子遊戯場での勝負で俺が負けたときに取り付けられた、太宰の言うことを一度だけ何でも犬のように聞くという約束。その約束を俺に忘れさせないためと言って贈られた、黒い革のチョーカー。

てつきり日頃の嫌がらせの延長ですぐ使ってくると思っていたその約束は、太宰が組織を抜けるまでどうとう使われることはなく、もう太宰の方が忘れてしまったのだろうと思っていたのに。「あのとときの約束、今使うことにしたよ。中では今後、私が女性に振られたときには全身全霊で私を慰めること」

ねえ、いいよね？　と言ってへらへら笑うクソ男に、知るかお断りだ馬鹿死ねよと言ってやってもよかった。だが、俺はその約束を持ち出されたとき、これは自分に与えられたまたとない失恋のチャンスだと思っただけだ。女に振られたから慰めるなどと、そんなつまらない内容で相棒時代の約束を消費する男に失望した、いや、失望したかった。できれば太宰からも、俺に失望して

ほしかった。

命令なら聞くさ、と答え、俺は条件を追加した。

「——俺をこの件で呼び出すとき、手前は手前を振った女のことを事細かに俺に話すこと」

「……はあ？」

「容姿は勿論、服の好み、喋り方、出自に生業、歩く時の足の捌き方からベッドの中での振る舞いに至るまで、全部だ。そうしたら——全部その通りにしてやるよ」

その夜以来、俺は太宰が女に振られたからと俺を呼び出す度に、その女の猿真似をして、太宰に抱かれに行った。

惚れた男から呼びつけられ身体を抱かれることは、数年の片恋がぶっ飛ぶほどの天国で、見知らぬ女の話聞かされそれに少しでも近づけようと演じる時間は地獄だった。

そのうちやめる。そのうち、あいつが飽きたら。

そんな言い訳を心の中で繰り返して、時に初心なお嬢様を演じ、時にタイトスカートを履いて黒のストッキングを破らせ、時にナース服を着て太宰の足に縋り付き、もっと酷くしてと懇願した。付き合う女の趣味に全く傾向というものがなかった。無口で主体性のない女もいれば、脈絡なくヒステリックに喚き散らす女もいた。

だから頑張って完璧に演じてやろうなんて思ったのは最初の一回だけで、二回目からは回を増すごとにそれっぽいや何かになって見せるだけ。

だって分かってしまったのだ。太宰はどの女のことでも『どうでもいい』のだと。

別に執着していたわけでもない女を真似るのに完成度などいらぬ。要は珍しくて、面白くて、笑えればいいのだ。

今回も俺は、太宰を面白がらせてついでに射精もさせてやるコメディアンであれば良い。その資料とやらを流し見して適当にモノマネし、あっはっは似てない傑作だと、笑われながら突っ込ませてやるのが役割だ。

そう軽く考えていた。自宅に帰って、届いた段ボールの箱を開けるまでは。

「なん…だ？ これ……」

宅急便の配達員から受け取った箱の中には数十冊の漫画本が詰められていた。適当に四、五冊抜き取って表紙のタイトルを見る。

『ダメ！ バックで入れるとすぐイッちゃう！』

『サキユバス喚んだら幼馴染が来た』

『調教愛く放課後の教室で転校生のアイツと…』

『【悲報】憧れの上司はニートの雌犬』

『ゴミ捨て場で拾ったヤンキーがこんなエッチになりました（私が育てました！）』

「……………うん」

見なかったことにしよう、と漫画本を箱に戻し、元通りに閉めようとしたとき、箱の内側にセロテープで貼り付けられていた白い紙切れがひらりと剥がれた。

『先日私が振られたのは、とにかくいっぱい喘ぐ子だったよ！ 彼女が愛読していた本を送るけど、だいたいこんな感じだったから、しつかり勉強しておいてね☆ 治』

できればそうでなくあってくれと願ったが、やはりこのエロ漫画の詰め合わせが太宰の言っていた『資料』だったと分かった。辛い。生きるって本当に辛いな。

な〜〜にが『治』だ、この署名の時点であいつが百パーセントふざけていることが分かる。

こういう類の漫画を見たのは、羊にいたとき以来だ。いいものを拾ったと数人がどよめきだつて女子に見つからないようこそそこそとアジトの隅で読んでいた。中也も見てみるよ、すごいぞ、と唆されて覗いてみたが、いいともすごいとも思えず、そつとその場を離れた。

まさか二十二になつてこんな物を部屋に置くはめになるとは。その太宰を振つた女というのは、何が楽しくてこんな男の欲望の箇条書きのような本を集めていたのか。自分が過去に割り切りで付き合つてきた女性たちとはあまりに行動が乖離していてなかなか想像が及ばない。

「だいたい『とにかくいい喘ぐ子』って何だよ!？」

わざわざ自筆のメモを貼っているからには、今回のあいつからのオーダーは、この『とにかくいい喘ぐ』であることに間違いなく、その採点はこの箱の中の『資料』から俺が何をどれくらい吸収して実演したかにかかつてくる。

今までだって別にマグロだったつもりはねえぞ! いや、最初の一回は…初めてだったし…

『マグロな子だった』というオーダーのときは意識して無反応に努めたのだ。

被虐趣味の女をオーダーされたときは、痛くされたこともあつて悲鳴に近い声をあげてしまつたし、それがヤツのお気に召した様子であつたので、俺も声を抑えなかつた。そういうわけで、喘ぎが足りないなんて言われる筋合いはない…何と戦っているんだ俺は。

恥ずかしがりやの中也には、ちよつと難題かと思つてね。

あいつの言つていた言葉を思い出す。なるほど、確かにこれは俺にはかなりキツイ。エロ漫画に出てくる女みたいにはちやめちやに喘いで見せろつてか? 俺でなくたって恥ずかしすぎて死ぬるだろうが、そんなん。

「……絶対出来ねえと思われてんだろうな」

実際無理だしな。はい却下却下、これは探偵社の寮宛てに着払いで送り返して、三日後の約束の時間には何か適当な仕事を入れてすつぽかす、それでおしまい。

「……一週間あれば……三日……三日か……」

待て、悪い癖だ。やめろ、考え直せ、中原中也。

こんなことでムキになってどうする、あいつの思うツボだ、恥の上塗りだぞと、無茶な要求に応戦してやりたくなくなっている自分に対して必死に言い聞かせる。だが、恥ならすでにかいているじゃないか、と自分が言う。

初めてだから優しくして、と甘えた声を出した。女物のストッキングにつま先を通した。ナース服をネットで注文した。毎回羞恥で死にそうになりながら、こなしてみせたじゃないか、と。

今回の要求を「恥ずかしいから」と突っぱねたら、今まで屈辱に耐えてきた自分たちが報われないではないか。考えてもみろ、今回は女装しなくてもいい、職業やら性格やらの設定を踏襲する必要もない、ただ漫画の中の女の子のようにとにかくくっぴいっぴい喘ぐだけでいいのだ。

「……太宰の野郎は、絶対俺が断ると思ってる」

約束の日に俺が逃げ出すことも、想定範囲内だろう。逃亡先に先回りされて、ホラやつぱり中也には難しかったねえ、尻尾巻いて逃げちゃった？と散々に煽り倒される。そこまで織り込み済みの無茶振りで、実際こんな要求が通るとは思っていないのかもしれない。

「げんんな……ここまで恥かかされて、今更なめられてたまるかよ……」

俺は箱の中に入っていた漫画本の冊数を数え、それから仕事用のスマホを取り出し、明日から三日間のスケジュールを確認した。

こんなときに限って、出張が二件も入ってやがる。敵対組織が仕掛けた罠と分かっているであえて出向いて潰して来いと首領から命じられていた案件だ。別日にリスケすることはできない。

「一、二：全部で三十冊か」

一日に十冊読めばいいわけだ。ははは余裕だぜ……。俺はできる限り本の表紙から目を背けながら、出張用のキャリアケースにそれを詰め込み、上から着替えの服を被せ、嚴重に鍵をかけた。太宰と夜に会う日を含めて、あと三日。プライベートの時間だけでは足りない。仕事の合間に目を通してパターンを暗記しよう。大丈夫だ。やれる。なにせ俺は、太宰が決めた妙ちきりんな作戦暗号を百以上覚え（させられ）た男なのだから。

「手前の思い通りに揶揄わせてはやらねえ、見てろよ太宰……！」

【一目目】

火薬の焼ける黒い煙が猛々とたちこめる中を駆け抜ける。俺の位置を探りかねているのか、当てずっぽうに乱射された弾丸が雨のように降り注ぎ、少し離れた場所に待機させていた部下たちが焦った声で俺を呼んだ。

「ブツブツ：あつあつしゅごい……馬鹿やろう慌てんな！ 雑魚は俺が散らす！」

重力操作で電柱を引っこ抜き、水平にぶん回す。硝煙がかき消された戦場に俺が跳ね返した弾丸が四散し、モスグリーンの迷彩服を着た敵対組織の連中が野太い悲鳴を上げて逃げ回る。

「ひっ！ ひいっ！ 助け……助けてくれえっ！」

「だめっだめえっ奥とんとんされてイッチャ……祖国の神にでも祈るんだな」

俺を睨み付け「Fucker!」と叫んだ男を地面に這いつくばらせ、頭を潰した。

「幹部！ お怪我はありませんか！」

「どこか怪我しているように見えるか……？ このハートマークはどうすりゃいいんだ……？」

「はい？ すみません、もう一度」

「何でもねえ。次に行くぞ。隊長を逃がした」

前情報によれば、リーダー格の男は異能力者のはずだ。さつき潰した男は影武者だろう。追いつめた時点で気づいていれば部隊を分けて追わせたのだが手間が増えた。やはり片手に本を持つての戦闘だと、視野が狭くなって良くないな、と思った。

【二日目】

豪華な外装の大聖堂に、重火器で武装した白い衣装の信徒たちが立て籠もっていた。周辺に民家が無いのいいことに惜しげもなくロケットランチャーをぶっ放してきたので、車と数名の部下を囮としてその場に置き、俺と残りの部下は地下の隠し通路から聖堂内へ侵入した。

「……中原幹部、あの……先程から何か呟かれているのは、どういう……」

「ひぎい♡雌にされちゃう♡転校生の雑魚ちゃんぽで雌に……気にするな。次の任務でちよつとな」

「！ そそつ、そうでしたか！ 幹部ほどの御方でも、そのような任務……断れないのですか？」

「手前……嫌ですつって断れる仕事がある組織にあると思ってるのか？」

「いいえ、そのようなことは！ も、申し訳ございません……」

「いや……わかりやいい。無駄話は終わらだ、行くぞ」

嫌だと言つてすんなり断れるなら、俺だつてそうしたいさ。

隠し通路の先は、聖堂内のパイプオルガンの裏に通じていた。信徒たちの服装とは逆に漆黒のベールとローブに身を包んだマリア像が壇上高くにそびえ立ち、銃を構えている信徒たちとそれに対峙する俺たちを見下ろしていた。

「よお……ここに居てくれたか。感謝するぜ、捜す手間が省けた」

昨日取り逃がした米兵崩れの武装集団の隊長、首領から必ず殺せと命じられていた男が、もう一つの敵対勢力のアジトであるこの場所に逃げ込んでいた。

「なぜ……なぜだ！ 貴様等にごここまでされるような覚えなど……」

「あん♡あん♡種付けされてりゅう！ 妊娠確実子種汁う♡……覚えがねえだつて？ オイオイ冗談だろ？」

それにしても音声に変えたのは正解だったな。俺は片耳のワイヤレスイヤホンを外れぬよう耳に挿し直し、そう思った。

やはり漫画を読みながら戦闘するのは良くない。昨夜のドンパチの後、俺は宿泊先の部屋でどうしたものかと思案した。かなり手間だが、明日読む分の漫画を音声読み上げアプリに読み込ませて、それをイヤホンで聞いて学習するというのはどうだろう。そう考えてスマホで検索していたら、なんと持って来た漫画に声優が声を付けている音声データが販売されていたのだ。そんな商品展開されるほど人気のある作品なのか、それとも最近の漫画はそういうものなのか、あまり新しい漫画を読まない俺にはよく分からなかったが、試しに該当のものだけダウンロードした。

結果は大正解。両手が自由な状態で太宰が押し付けてきた『資料』をどんどん消化できる。語尾に付いているハートマークの読み方も概ね理解した。これが付くと直前の音節の発音が高くなるのだ。昨日読んだ漫画に出てきた「……♡」のような場合はどうすればいいのか分からないが、それも後でボイス付きデータで確認すればいいだろう。

「手前等はうちの商売の邪魔をした。それだけで理由としちゃ充分なんだよ……♡」

あつと間違えた。イヤホンから聞こえる音声に集中していたから、意味もなく語尾を高くしてしまった。目の迷彩服の男が「侮辱しおって…若造…！」と呻きながら両肩を震わす。その肩から先の腕の筋肉がばきばきと隆起していく。——肉体強化の異能か。

「侮辱したつもりはねえんだが…まあ、一人だけ異能持ちでありながら、部下も組織も捨ててこんな田舎の武器商人とつるんでるあんたに、払う敬意も持ち合わせていないが」

勉強の時間が惜しい。殲滅だけが目的の任務だ、さっさと終わらせて横浜へ帰ることにしよう。俺が片手を挙げたのを合図に、部下たちが一斉に信徒たちへの銃撃を開始する。向こうもそれに応戦し、激しい跳弾に弾かれたオルガンのパイプがキンと音を鳴らした。

「オラ味わえよ雌犬！ マゾ穴からよだれ垂らしてキャンキャン鳴きな！」

あつ、間違えて今度は男の方の台詞を反復してしまった。膨れ上がった脚で床を蹴り上げて俺に飛び掛かってきた奴の拳を受け止め、重力を込めて殴り返す時に、イヤホンから聞こえてきた台詞をそのまま口に出してしまった。

何を言われたのかと、一瞬怯んだ男の顔面に俺の打撃はまっすぐ入り、マリア像の胸に抱かれるような格好で宙を舞った。聖像はがらがらと崩れ落ち、その瓦礫の下敷きになってもがく男の後始末をするには、ただ後ほんの少し、重くしてやるだけで事足りた。

「……♡ 楽な仕事だったな。帰還するぞ」

「はっ！」

部下たちが姿勢を正して返事をし、聖堂の外で待機している仲間に連絡を取る。

……なるほど。息を詰めて気持ち高めに吐けばいいのか。

【三日目】

「おわっ……た……」

エロ漫画三十冊、全部読み切った。音声で聞いただけのものも、後から漫画を読み返し、どういふ表情でその声を出しているのか確認した。任務が想定より早く片付いたために、昨日の夜から今日一日はフリーになったことに助けられた。

この三日間で、ものすごく知能指数が下がった気がする。だが、大体パターンは掴めた。基本的には、行為の最中に状況を説明しまくり、その語彙は下品であればあるほど良く、相手が何か喋ればそれにハートを付けて応じ、相手が喋らない場合は自分からねだる。後は頻出フレーズを頭に詰め込めるだけ詰め込んだので、ノリで口から出てきてくれるはずだ。たぶん。

羊を抜けてポートマフィアに参加することを決めて以来、自分の直属の上司であった尾崎紅葉から、暴力だけでなく教養を身につけてそれを交渉に活かせ、と指示され、正しい国語、外国語、歴史、文学、芸術、それまでは見たことも聞いたこともなかった学問に触れた。

今回学んだのは、その中で最も知らない知識だった。コトが済んだらすぐさま忘れよう。

「俺にここまでさせやがって、太宰……今夜、度肝を抜いてやるからな！」

あーっはっはっは！ 俺は高らかに笑いながら自室のベッドに倒れ込み、そういえば昨夜帰ってきてから一睡もしていなかったと思ひ出し、途端に重くなったまぶたを閉じた。

約束の時間まで少し仮眠しよう。準備の時間も要るから二時間前には起きなければ……。

毎回毎回、後ろの準備を済ませ、角砂糖を嚙んで覚悟を決めて、あいつの望む演目を踊って、俺はなんてけなげで愚かな男なのだろう。あくびで出た涙が、スンと鼻先に沁みた。

そして、このときがやって来た。

「……はあ」

待ち合わせ場所のバーのカウンターで頬杖をつき、『ALEXANDRITE』と表に印字されたこの店のブックマッチをくるくると指で遊ばせる。コーヒーカップの中の黒い湖面に映った己の顔を見て、俺はため息と角砂糖をふたつ落とした。

別に、この店で待ち合わせようと指定されたわけじゃない。ただ、このバーから始まった関係だから、太宰か俺どちらからも場所の指定がされないときは、なんとなくここで待つようになったのだ。太宰のやつも、俺から何も言わずともこの場所に現れる。

紙マッチの赤く膨らんだ頭部を擦り、しゅわしゅわ燃える小さな炎を手で隠して、啜っていた煙草に火を点ける。いつも使っているガスライターで点けるよりも、少し焦げた煙の匂いがしたマッチなんて普段は使わないけれど、ここに来ると、ついカウンターに置いてあるのを手に取ってしまう。

いつもより一粒多く砂糖を入れたコーヒーは、自分の舌には甘すぎでうまく飲み込めなかった。煙草にも合わないし、毎度嫌々飲んでいるのだが、これは、割と迷信や願掛けを信じる性分の自分が思いついた『おまじない』なのであった。

この甘い菓を飲み干したら俺は、女になる。嫌味に嫌味で返すことも、悪戯に暴力で返すこともしない、ただあいつの食指が動いた要素をインストールした女として、一晚踊る。

はやく。はやく来いよ。

置時計の針を見つめながら、じりじりと太宰を待つ。もうしばらくここで心の準備をしていたような、これ以上待たされたら、自分にかけて暗示と脳みそに詰め込んできた台詞が消えてしまふのではと不安なような、落ち着かない心地だった。

裏路地から地下への細い階段を降りて来る足音。きい、とバーの扉が開く音。俺は、そちらへ目線をやらない。とつくに空になったコーヒーカーップの縁を啜るふりをして、太宰が俺の二つ隣のストールに腰掛けるのを待った。

「……………やあ、今夜も飲んでいないのだねえ」

視界の端で黒髪と砂色のトレンチコートが揺れ、雨の日の混凝土のような匂いがした。俺のすぐ隣にすとんを腰を降ろした男は、行儀悪く片足だけ曲げてストールに載せ、空っぽのカップの横から煙草とマツチを盗んでいった。

「……………飲んでるだろ」

俺の声は掠れていた。このバーで会うときは、いつも間に一つ空けて座り、一、二杯飲む間に太宰が隣に詰めてきて、それを合図にホテルへ移動していたのに、どうして今日は。

「私も、お酒という気分じゃないかなあ。ねえ…もう移動しない？」

盗んだ煙草を堂々とふかし、俺の横顔にふうっと吹きかけた。なにいつてんだ、座ったんなら一杯頼め、マナーだろ、とか、そんなようなことを言い返したと思う。

どうしよう。ひよっとして、俺は、緊張している。

太宰は、えー、とか言いながら日本酒を一合頼み、俺はそれに乗っかってウイスキーを頼んだ。あまり得意ではないが、強い酒を入れて景気づけしておかなければ、シミュレーション通りに動けないのではないかという不安があった。

「ね……資料、読んでくれた？」

「あ、ああ。読んだよ、全部……」

「全部！ あっはは、ほんとに真面目だねえ、中也是」

どうして、今日に限ってこんなに緊張しているのだろう。いや、太宰とこういう関係になつてしまつてから、会う度に「うまくできるだろうか」という緊張は感じていた。だけど、今夜は今にも席を立てて全速力で逃げ出してしまいたいくらい、揺れている。

そんな俺に反して太宰はやけに上機嫌で、肘と肘がぶつかりそうなくらい近くに寄つて、どれが一番面白かつたあ？ なんて尋ねてくる。

「ストリーなんて追つてねえよ。口調が知りたかつただけなんだから……」

口調、ああそういえば、これを聞いてなかつたなと思つて、「その女の一人称は何だつた？」と質問した。完璧に似せるつもりもないが、せめて一人称と太宰の呼び方くらいは同じにしてやろうと毎回ことに及ぶ前に聞いていたことだ。

「んー……？ 『俺』だつたかな」

「俺？ 女だろ？」

「別に珍しいことでもないでしょう？ マフィア組織にもそういう子いたじゃない」

「まあ……そうだけだよ。手前の趣味はマジで雑食だな」

「博愛主義つてやつ？」

「全てを愛するのと、全て愛してないのは別もんだろ」

「同じじゃない？ あとは何だつて、私をどう呼ぶか、か。ちよつと覚えてないなあ」

「恋人が自分を呼んでいた声も思い出せねえのは、まるで愛してないつうことだよ」

一人称が『俺』で、太宰のことをどう呼んでいたかは分からない、か。そうになると、太宰、と呼ぶしかないわけだが、なんだかそれは、普段の俺とあまり違いがなく、ちよつと嫌だ。

「中也に愛を説かれるとは、不愉快だなあ」

「どういう意味だよ。言つとくが、人間失格の手前よりは余程知ってるつもりだが？」

「へえ？ 犬のくせに誰かを愛したことがあるってこと？ いつ？ 私の知ってる人間？」

十五のときから現在進行形だし、手前の知ってる人間つつうか手前だよ、とはまさか言えるわけがないので、手前に教える義理はねえよと吐き捨て、グラスいっぱいウィスキーをぐいっと飲み干した。

「あーあー、そんな飲み方して。その愛やら恋やらはどうもうまくいっていない様子だね。まあ中也みたいに乱暴で気障で趣味が悪くておまけにチビじゃ、御婦人に好かれっこないか」

「……うるせえ」

好かれていないのは、年単位で思い知ってるさ。

だから、こんな方法で触れてもらおうとしたんだ。どんだけみじめな思いをしたって。

なに泣きそうになってるの、腹立たしい。と、太宰が小さく舌打ちして、マスターにカードを渡して勝手に会計を済ませていた。珍しいこともあるもんだ、太宰が支払いをしてくれるなんてと思ったが、よく見たらマスターから俺の手に返ってきたカードには俺の名前が刻印されているのだった。またやられた。このかいしようなし。

行くよ、と手を引かれて店を出た。太宰と手を繋いで歓楽街を歩いている俺をもし誰かに見られたら、どう思われるだろう。ぼわぼわと頭が熱くなっていて、幾つものネオンの色がにじんで交わり、その色の中を泳いでいるような心地だった。

手慣れた様子で部屋を選ばれ、べらべらのスリッパを履いて大きなベッドの前までたどり着いた頃には、ちよつと先にシャワーを浴びてくると、定番の時間稼ぎを口にするくらいに冷静さを取り戻していた。酔っぱらっている間に全部終わっていたら良かったのに。

バスルームへ行こうとした腕を取られ、引き止められた。

「今日も一度浴びてきたんでしょ？ これ以上待たせないでよ」

「……なんで、今日はそんなにがつついてんだよ」

声も覚えていない女のセックスがそんなに良かったか。それとも、三日前から楽しみにしていたお笑いコンテンツが始まるのを待ちきれないか。

どちらにせよ、もう開演の時間だ。腹を括るしかない。

「失恋の傷を、三日寝かせて来たからね」

太宰は空調の効いた室内で暑くてたまらないという風にトレンチコートを脱ぎ、ループタイを外した。ダンスのパートナーをエスコートするようにうやうやしく手を引いて、ふかふかのベッドの上に俺の身体を沈める。

失恋の傷だなんて、なんて平然と嘘をつく男だろう。

「さあ、中也。お勉強の成果を、見せてごらんよ」

本当の失恋が、どれほどどろどろしたものか、この傷口を開いて見せてやりたい。

「……ん♡ はぁい♡ わかりましたぁ♡」

「……………!! ……………っ!!」

ハートを付けて返事した俺を見て太宰は絶句し、両手で口を押さえてぶるぶると震えた。どうだ見たか、今夜は笑い死なせてやる。どうせ出来ない俺をナメたことを後悔しろ。

「ちゅうやは自分でぬぎぬぎしますか？ それともだざいがぬがせたい？」

「つちよ、まって待つて無理おもしろい。一人称は俺でいいから、あと私が脱がすから」

一人称はやっぱり俺でいいのか。できるだけ素の自分から乖離している方が開き直って演じられるのだが、はつきりリクエストされては仕方ない。

太宰の指が、首筋に触れる。出会った頃から常に死を願っていたくせに、その性質に似合わず体温が高いことを、汚濁を解除される瞬間と、この戯れに耽っている間だけ思い知らされる。クロスタイが床に落とされ、ベストの釦を外された。

「……は、ず、はずかしい……っ」

ハート付け忘れた。あと、実際恥ずかしい。手の甲で目を隠したら、「だあめ、ちゃんと見て」と甘ったるい声で咎められて、剥がされてしまった。

今日は女装しなくていいから楽だと、そう思っていたけれど、前回、前々回と着替えさせられていただけに、普段の自分の服装のまま太宰の手で脱がされていることを意識したら、なんだかどうしようもなく恥ずかしくなってきた。

「……たまには、人を殺して、お風呂に入らないままおいでよ。そういう君も抱いてみたい」

「な……に、言……って……あ……つ、そ……れ……じゃ、い……み……ない……」

いみなくないよ、と言……って、太宰は俺の白いシャツを脱がすと、腰からあばらへかけて身体の造りを確かめるように撫でて、胸に唇を寄せた。

「あ……つ……あ……♡ う……あ、や……だ、ん……ん……♡♡」

乳首を舌先で潰されて、じゅうと吸われる。太宰がいなかった頃は自分で弄っていて、太宰と再会してからはこうして粘膜による刺激を受けるようになったそこは、簡単に感じて固くなる。

「ひ、ん♡あ、あっ♡ちくびっ♡だめ♡つまんじゃ、やっ♡」

舌先でころころと転がしながら、もう片方の乳輪を指で刺激して、ぶくりと膨らんできた乳首を二本の指でぎゅっと潰される。痛みに近い感覚で痺れたそこをとんとんと指で叩かれて、断続的に送られる快感に腰が重くなつてゆく。

「あんっ♡あ、う、はあ♡そこ…だめえ…っ」

「どうしたの？ 中也あ、おっぱい気持ちいい？」

「…あ、お、おっ…」

「んんん？」

見せつけるように真っ赤な舌先で俺の乳首を舐めながら、太宰が顔を上げて俺の目を見る。

中也、と呼ばれた。促されている。恥ずかしい言葉を吐いて乱れろと。

「おっ…っ、い、きもち…い…」

「えっ？ なあに？ よく聞こえなかった」

おかしい。言えない！ 頭の中ではこの状況に合った台詞が沢山丸暗記したフレーズの中から検索結果として弾き出されているのに、「ああん♡勃起ちくびピンピン♡オスの指ですぐエレクトしちゃう淫乱ちくび♡もっともっとかわいがつてくだけしゃ…♡」という最適解がすぐここまで出ているのに、声帯が震えない。処女膜から声が出ない！（※なお処女ではない）

「ふふ…どうしたのかな、中也は」

たくさんお勉強したんでしょ、と嬉しそうに笑って、太宰は俺の頬を両手で挟み、キスをした。魔物のように甘く底の見えぬ瞳に見下ろされ、離れてはまた唇にキスが落とされる。それは次第に舌を絡めて唾液を送り合う深い口づけに変わっていった。

音を立てて舌を吸われると、びくんと腰が揺れてしまう。快感と酸欠で、ぼうっと霞んできた意識の端に、ちゅうや、と太宰が俺を呼ぶ声が響く。

「んっ…んん、ふ♡あ…♡」

呼ばないでほしい。中也、と俺の名をそんな、まるで恋人を呼ぶみたいに甘く呼ばれたら、ただでさえ一人称も二人称も衣装さえ今日は自前なのに、誰を演じたらいいのか分からない。他人事にできない。これじゃ俺が、俺自身が、好きな男に求められているみたいじゃないか。

しがみついてキスに応えながら膝でこそっと太宰の下肢を探った。ズボンの上からでも興奮しているのが分かって、ぞくぞくと背筋が痺れる。

「なあに、おねだりしてるの？」

可愛いことするね、と言って、キスを続行しつつ、お返しとばかりに太宰の手が俺のベルトへ伸びた。片手だけで器用に腕がされて、ボクサーパンツの上からペニスを撫でられる。

「ひあっ…ん、はあ…っ」

優しすぎる刺激に、思わず太宰の手に自分のペニスを擦り付けるように動いてしまう。はしたないな、とキスの合間に囁かれると、ビクンッ！と身体が跳ねて、それをまた笑われる。

そうだ、俺は太宰を、笑わせようと思ってこんなこと、しているんじゃないか。太宰とのキスがあまりにも気持ち良くて、普通に感じてしまっていたけれど、もらった資料のように、俺はとにかく、たくさん喘いでみせなければならぬ。

「だ…ざい…♡もう、はやく…ほしい」

俺は自分で一枚だけ残されていたパンツを脱ぎ捨て、脚を開き太ももを掴んで持ち上げた。太宰から見えるように尻を掴んで割り開き、アナルの入口に中指の先をつぶんと埋める。

「……えっちなあ」

すぐに挿れたくなっちゃう、と言いながら、太宰は俺の指をよけて、俺よりも長い指でアナルのふちをなぞる。くすぐったいのと、これからされることへの期待で、そこがひくひくと収縮したのが分かり、羞恥心で頭が煮えるようだった。

恥ずかしい。いつの間にか首のチョーカーも外されて、それだけ床でなくベッドのヘッドボードに置かれていた。もう何も着てなくて、何も守ってはくれない。早く繋がって揺さぶってくれなけりゃ、恥ずかしすぎて叫びだしてしまいそうだった。

「い、れてっ、じゅんび…してきたからあ…っ」

来る前に自室で準備をしてきたので、指先で孔を拡げられると中からローションがとろりと溢れてくる。太宰の指は俺に吸い込まれるようにして、ちゅぷんと中へ潜った。

「んっ、あ…♡」

「うわ、中也のナカ、熱くてトロトロ…ねえ、おまんこにください、っって言ってみて？」

「最低か…?」

にやあと笑って、言えたらおちんちん挿れたげる、と言っただけ。つうか、こいつはなんでそんな綺麗な顔で淀みなくおまんこだのおちんちんだのと言えるのか。だが確かに、あの漫画本の中では、女たちはそのくらい平気で言っていたし、それよりよほど卑猥な単語を口にしていた。

「……あ、あ…、お、おれの、お……」

「うん、おれの？」

「俺の…お、お、おま……」

「がんばれ♡あと一息♡」

いやおまえがハートを付けるなよ。そして、やっぱり俺はうまく言えない。あんなに勉強したのに、今ここで言うべき台詞は「俺のおまんこ♡ 太宰の絶倫ちゃんぽで奥までずんずんしてほしくてびしょびしょに泣いてましゅ♡ はやくそのおっきいので栓して塞ぎ止めてえ…♡」であることは分かっているのに、最初のワンフレーズからしてもう恥ずかしすぎて言葉にならない。

言えない。言えないそんな台詞、好きな男の前で。

「す……き……」

「——はっ？」

「あ………あっ？ いや、いや違う、間違えた！」

困りすぎて、つい考えていたことが口から洩れてしまった。よりもよって絶対に洩れてはいけない言葉の方が出てしまった。太宰に片想いをしていることが知られるよりは、まだよっぽど淫語オンパレードの方がましだ！

「えっと…す、すき♡ おれ、おちんぽでおまんこズコズコされるのだいしゅきな♡ はやく♡

おれの尻まんこビショビショで決壊寸前♡ 太いのでズブツて栓してくだしゃいな♡」

「……………」

「……………」

は~~~~~死にたい！ 殺してくれ~~~~!!

「………言い間違いだったことは分かったけど、それにしても酷い。怒りと失望で萎えた」

「い、怒りって、怒ることはねえだろうが。笑うとこだろ……」

芸人がスベったときってこういう気持ちかなのかな。太宰は何にそんなに怒ったんだか、はああと深いため息を吐いて、中へ入れた指を増やし、性急にかき混ぜた。

「アッ！ 待っ…、あう、ん！ ゆっくり、ひっ…♡」

「ズコズコされるのだいしゅきなんでしょ、ねえ、このまま先にイかせてあげる」

「なっ…ん、ああっ♡ あんツ♡ まっれ、あひッ！」

太宰の指はばらばらにうごめきながら前立腺を探り当て、指先でぐりぐりと押し潰してくる。

尻穴と睾丸の間から骨盤へかけて電流のように快感が走り抜け、身体が勝手にびくんびくん跳ねて、反射的にベッドの上方へ逃げようとした腰を掴んで引き戻された。

「んうーっ♡♡ そこお、あ、あ、ああっ♡」

逃げ場もなく、ただ背を仰け反らせて快感に耐えることしかできない。執拗にしこりを擦られ、せり上がる射精感に腹筋がぶるぶると震える。

「あ、もお、もう…っ、駄目…っ」

「いっちゃんいそう？」

「う、んっ♡ てる、で、ちゃ…♡ あああンツ♡♡」

腰を突き出す格好で、太宰の指を内部でぎゅうっと締め付けながら、腹の上で白濁を放った。

あーあ、またクリーニングサービス使わなくっちゃ、と普段からドブ川に浸かったシャツを着て歩いているくせに、意地悪を言う。俺の精液が飛んだシャツを脱いでそこらへ放り投げ、自身の前も寛げてその存在を見せつけてくる。

「はあ、はあっ、は…：…なん、だよ…萎えてないじゃねえか」

「いや、さっきの酷いのでフニャフニャになったのは本当。中也のナカが熱くて、早く入りたくなっちゃったから頑張って勃たせたの」

「がんばった…：…なんて言っても褒めねえぞ」

「えー？ 中也だつて欲しかったんだから、褒めてくれてもいいのに」

荒い呼吸を整えながら太宰を睨むと、太宰は指が出て行ってひくついている俺のアナルを見ながら素直じゃないと言つて、俺の膝の裏に手を入れて脚を持ち上げ、体をぐつと密着させた。

「は……あ……う♡」

布越しではない、太宰のペニスの生々しい感触が、俺の濡れた粘膜に触れて、思わず息をのむ萎えていたなんて嘘みたいに大きくなつていて、目が釘付けになり、あれがこれから入ってくるのだと想像したら、腹の奥がきゅんと疼いた。

つるつるして、えげつない色をした亀頭がアナルに触れる。

「あ……♡」

嬉しい、とあからさまな声が出てしまつて、太宰が俺の顔を見て「は、」と唇を歪めて笑つた。射精の余韻でまだひくついていた入口が押し開かれ、待ちわびた質量でずんと貫かれる。

「つうう！ んぁ、あぁあ……♡♡♡」

「う……、やば、中也、また軽くイッた？ ナカすっごい締まる……」

もつてかれそう、と呟いて、ぐちゅぐちゅと俺の中をかき混ぜるように腰をグラインドさせ、その度にびくびくと反応する俺の腹を樂しげに撫でる。

「いま、このへんかなあ。ねえ、どこまで入れてほしい……？」

ずちゅ、ずちゅつ、とペニスを抜き差しして内壁を擦り上げながら、太宰は俺の汗で湿った前髪をかき上げて、俺のとろけた瞳の中に無理やり自分を映し、そう尋ねた。

「ひっ♡ ひゅ♡♡ もう、もう、じゅうぶ、ん……♡」

「え？ ふふ……うそつき。ここ、欲しいでしょ……？」

「んあアッ！♡♡ いやっ♡ だめ、だめらっ♡」

いちばん奥を亀頭でごんつと突かれる。それをされると、視界がちかちかつと弾けて、全部真っ白になってしまう。「ねえ、だめ？」声ばかり気遣うような優しさで、骨盤にずんと響くほどに強く腰を打ち付けられる。じわじわと涙腺から水が溢れて、わるそうな笑顔が滲んだ。

「だめ…じゃ、ない…♡でも、でも……」

そこを開かれたら、ばかになってしまう。またさつきみたいに、何を口走ってしまうか分からない。気持ち良すぎて、全部、あばかれてしまうかも。

涙を流しながら、ぶんぶんと首を横に振った。太宰の手の平が俺の頬にそれを塗りたくるように撫でて、ちゅ、と子供がするみたいなきスを一度した。

「ひ……あぐっ…だ…ざ、や…」

身体をほとんど二つに折り曲げられて、真上から突き刺すようにペニスを押し込まれる。そのまま最奥のきつく閉じた壁を扶じ開けるようにごちゅんっ！と叩きつけられた。

「つか…はッ！ ひぐ、んお…んんんッ♡♡♡」

ぐわぁんと世界が揺れた。ぐちっ、ぐちゅっ、と亀裂に容赦なく亀頭を押し込まれる。呼吸がおかしくなると、アナルがぎちぎちと締めまり、内部の肉棒を追い出そうとしたが、太宰は苦しげな息を吐きながら、無理やりにペニスを引き、また奥に強く打ち付けた。

「ひぎいいッ♡♡ いやっ♡そこ、らめっ♡まってえ！♡♡♡」

「…待たない、よ。こんな…っ、きもちいいのに……」

太宰が眉をしかめ、歯を食いしばりながら、執拗に腰を振っている。その額からぼたりと汗が落ちて、俺の涙と一緒にシーツを濡らした。

皮膚も筋肉も骨も、ばらばらに溶けてゆく。両脚の感覚が怪しくなっていて、だらりと力を失ったそれを、太宰が自分の肩の上からシーツの上へと降ろし、ゆっくりと俺の身体を押し潰すように上から体重をかけた。

必死にシーツを握りしめていた手が、びたりと密着した太宰の胸元からした汗の匂いに吸い寄せられるように、その背中へ回る。俺にこんなことをしているのはこの男なのに、すがり付けるものはこれしかないから、両手で汗に濡れた背中を撫でながら、必死にしがみ付いていた。

「はっ…中也、言つてよ…気持ちいい？」

「あつ、ああ♡ん♡ん♡きもちいい♡♡らざい♡い♡い♡よお♡♡♡♡おぐっ♡♡ひもひいい♡♡おかひぐなっひゃう♡♡あっあっあっ♡♡♡だめっ！♡またいぐっ！♡♡ひんらうう♡♡♡だぎ…♡♡ッは、あ♡しゅき♡♡♡だぎ…アアッ！♡ああ〜♡！♡♡♡」

「…うあ…！」

気が狂いそうな快感に、指を噛んで身悶えながら絶頂した。中がぎゅううと締まって、太宰のペニスがどくんと震えたのが分かった。じわりと腹の中に熱いものが流れ込む。俺は口をだらしなく開けて、その感触に感じ入っていた。

太宰にバレたら死ぬので絶対言わないが、初めてこいつとしたときに、自分の性癖で気づいてしまったことがある。俺は、太宰に中を出されると、ものすごく何かが、満たされるのだ。

初めてのときに「ゴム無し中出しはねえわ」と散々やつつのセックスを罵倒したものが、それ以降もゴムを着けると俺から言ったことはない。顔やら腹やらに出してくるようなら着けさせようと思ったが、太宰は頼んだわけでもないのに毎回中で射精する。さっきみたいに、少年のように小さく呻いて、俺の身体を侵食する。それが、たまたまなく、すきなのだ。

「……ねえ、もう一回いい？」

うっとり、精液で満たされた腹を撫でていたら、柔らかくなった太宰の性器が不穏な動きを見せた。ちゅぷ、ちゅぷ、と俺の感じる場所を揺らし、快感の波を呼び戻そうとする。

「あ…っ、い、やだ、もうおわり、だ。もう出した、だろ」

気持ちいい。中に出されたまま動かされると、全身が性感帯になったかのように感じる。

これは、駄目だ。これを許したら、本当に意識を飛ばしてしまう予感がした。さっきも何か口走ってしまった気がするのに、これ以上強い快感を受けたら、どうなってしまいか分からない。

「ちゅうやあ…は…っ、きもちい、止まんない……」

「あう、あ、あ、あっ、やあ…だめ…」

言ってしまうもいいだろうか。女の代わりなんて本当は嫌だと。女装もしない、口調も俺のままでもいいのなら、俺を、中原中也を、ただ好きになってはくれないか、と。

……いや、いけない。これほど多種多様な女と関係を持っておきながら、誰一人として自分の心には触れさせないような男に、どの女も言ってきたような台詞を吐いたら、待っている未来は太宰の落胆した顔だけだ。あの能面のような顔で見つめられるくらいなら、嫌われていた方が、あるいは四年間そうしておかれたように、会えなくなる方が余程良い。

「……い、やだっって言ってるんだろ！ この絶倫スケコマシ！」

快楽に負けそうになっていた身体を奮い起こして、太宰の顔に頭突きをかまし、腹を蹴飛ばしてベッドから落とした。太宰は「いたっ！」と間抜けな声を上げて床に頭を打ち、下半身だけはぎりぎりシートの上に残って丸出しのままぶつくさ文句を言っている。

「ムードがなーい……こういうところがさあ、君、本命に嫌われるんだよ」

バーでも突っかかってきたが、こいつは何を勘違いしているのだろう。俺が誰かに恋をしているように見えているというならそれはご明察なのだが、だとしたら恋愛中の俺がおまえに抱かれる理由は何だと思ふのか。まあ、太宰に恋焦がれながら気晴らしに女を抱いていた時期のある俺も、誰にも恋してないのに失恋したから慰めるなどと言う太宰も、恋に嫌われている人間なので、恋の何たるかを語る資格などないのだろう。

「余計なお世話なんだよ。手前には関係ねえって言っただろ」

教える義理はない、と言ったのだった。まあ、どちらでも同じことだ。

「ふーん……そう。やっぱり……そうか」

「何だよ。何がやっぱりどうだっつうんだ」

「別に、独り言。あ、そうだ。私、君が汚したシャツをクリーニングに出すから、このまま宿泊にするけど、中也はどうする？」

「あつそ。俺は帰る。明日も仕事だし、手前と宿に泊まるなんざ御免だ」

「え〜♡今度一緒に泊まってくれるって言ったのに〜♡」

「ハートを付けんな！ そんなこと言っつてねえ！」

「言っつたよ〜♡ ちょっと前のことだから忘れちゃったのかな♡ 中也の若年性健忘症♡」

「ほんと喋らせたら腹立つな手前は……！ そういうところが女に嫌われるんじゃねえか？」

女性にはこんなこと言わないよお、とベッドの上で素っ裸のまま胡坐をかき、ふわあと欠伸をしたので、ついつい整った歯並びや、つんと尖った犬歯をじつと見つめてしまった。

俺はこんなにも、あからさまに好きなのに、どうして気づかないのだろう、この馬鹿は。

「……疲れた。なあ、もう次の相手には、振られんなよ」

「やだなあ、私ほどのいい男がそう何度も振られると思うかい？」

何度も振られているから言っているのだ。だが、ここ二日間ともに睡眠を取れていないし、これ以上言い合いをする元気はなかったので、無視して俺は身支度を始めた。

それから、きっかり一週間後のことである。

「もしもし、中也？ 実は私、また振られてしまつてね」

「冗談だろ……」

「流れ者のチャイニーズでね、風俗嬢をしていて、とにかくフェラのテクニクが凄くてね、献身的な子で、自分から上に乗っていっぱい動いてくれて……もしもし聞いてる？ 中也？」

もう無理だ。献身的な風俗嬢って何だよ!? フェラなんて、そもそも男相手の経験が太宰としかないので、そんなこと一度もしたことがない。練習するか、組織の系列店の嬢に報酬を渡して教えてもらうでもしないと……。少し時間をくれ、と言ったら、俺がそう言うことを予測していたかのように即座に却下され、「今日。場所だけは中也が指定してもいいよ」と言われた。

一方的に電話が切られた後、俺は市役所通りの路上でスマホを手から落としたまま、しばらく立ち尽くしていた。いったい、俺は、いつまでこんな気持ちよくて傷つく行為を続けるのだろうか。次の一回で、最後にしよう。太宰が何を言つてこようと、次の一回で、終わりにする。

俺はスマホを拾い上げ、場所の指定を太宰にメールで送った後、太宰の番号からの着信は受けられないよう設定し、また歩き出した。

これがエピソードの始まり。この時の俺は、そう思っていた。

個人サイトのメールフォーム（匿名で送れます）→
三度の飯より感想が好き！感想くださーい！！
<http://ushirogami.echo.jp/contact/>



とにかくいっぱい喘ぐ子って何だよ!?
—ALEXANDRITE Episode.2.5—

2020/10/11 発行

繪子（うしろがみ）

Twitter：@EcosanB

Pixiv ID：2660047

HP：http://ushirogami.echo.jp/

印刷：株式会社ブロス様

この本は個人的に作られた非公式ファンブックです。原作者様・出版社様とは一切関係ありません。無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載（SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む）を禁じます。処分する際は同人誌専門の中古書店に売却していただくか、中身が分からない状態にした上で可燃ゴミとして廃棄してください。